



Title	大樹伝説と琴
Author(s)	勝俣, 隆
Citation	長崎大学教育学部人文科学研究報告, 45, pp.1-10; 1992
Issue Date	1992-06-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/33217">http://hdl.handle.net/10069/33217</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T00:10:47Z

# 大樹伝説と琴

勝俣 隆

A Koto (Japanese Harp) and the Legend of a Towering Tree

Takashi KATSUMATA

此の御世に、兔寸河の西に一つの高樹有りき。其の樹の影

れる。

旦日に当れば、淡道島に速び、夕日に当れば、高安山を越え  
き。故、是の樹を切りて船を作りしに、甚捷く行く船なりき。  
時に其の船を号けて枯野と謂ひき。故、是の船を以ちて旦夕  
淡道島の寒泉を酌みて、大御水献りき、茲の船、破れ壞れて  
塩を焼き、其の焼け遺りし木を取りて琴に作りしに、其の音  
七里に響みき。爾に歌曰ひけらく、

枯野を 塩に焼き 其が余り 琴に作り かき弾くや

由良の門の 門中の海石に 触れ立つ 浸漬の木の さ  
やさや

右は、古事記の仁徳天皇の条の一節である。ここには、其の樹影  
が、朝には淡道島に速び、夕べには高安山を越える大樹が登場する  
が、その大樹から枯野という名の船が、さらに、其の船の焼け遺り  
の木材から琴が作られる過程が描かれている。

一方、これと良く似た記述が日本書記応神天皇の条にも見いださ

五年の・・・冬十月に、伊豆国に科せて、船を造らしむ。

長さ十丈。船既に成りぬ。試に海に浮く。便ち軽く泛びて疾  
く行くこと馳るが如し。故、船を名けて枯野と曰ふ。・・・  
三十一年の秋八月に、群卿に詔して曰はく、「官船の、枯野  
と名くるは、伊豆国より貢れる船なり。是朽ちて用あるに堪  
へず。然れども久に官用と為りて、功忘るべからず。何でか  
其の船の名を絶たずして、後葉に伝ふること得む」とのたま  
ふ。群卿、便ち詔を被けて、有司に令して、其の船の材を取  
りて、薪として塩を焼かしむ。是に、五百籠の塩を得たり。  
即ち施して、周く諸国に賜ふ。・・・初め枯野船を、塩の薪  
にして焼きし日に、余燼有り。則ち其の燃えざることを奇び  
て献る。天皇、異びて琴に作らしむ。其の音、鏗鏘にして遠  
く聆ゆ。是の時に、天皇、歌して曰はく、

枯野を 塩に焼き 其が余 琴に作り 掻き弾くや 由

良の門の 門中の海石に 触れ立つ なづの木の さや  
さや

右の応神記の記述でも、船を焼いて、燃え残りから琴を作ってお  
り、内容はよく類似しているが、ただ、枯野という船が、大樹から  
造られたという表現が見られない。

仁徳記の例は、明らかに大樹伝説と呼ばれ得るものであるが、応  
神紀の方は、大樹伝説の根幹である大樹自体の描写がない。これ  
は、元来、大樹の描写がなかったものか、それとも、本来は、大樹  
の表現はあったが、何らかの理由で欠落したものか、いずれかであ  
ろう。

本稿では、大樹伝説の諸例の記述を検討し、大樹伝説と琴の関連  
について考察してみたいと思う。

### 一、琴と大樹の関連について

応神紀の記述については、その出典が、『後漢書』蔡邕伝にある  
ことが、古くから指摘されている。<sup>1</sup>それは、次の通りである。

呉人に桐を焼きて以って爨ぐ者有り。邕、火の烈しき声を  
聞き、其の良木なるを知り、因りて謂ひて裁ちて琴を爲る。  
果たして美音有り。而して其の尾猶焦げたり。故に、時人名  
づけて焦尾琴と曰ふ。

確かに、一度は火を付けられた木から琴を作ったところ、良い音  
色をしていたという記述は、応神紀とほぼ一致する。しかし乍ら、  
細部についてみれば、応神紀では、船の燃え残りの木から琴を作る  
が、『後漢書』には、船の記述はなく、また、前者では、どうして

も燃えずに残った部分があったわけだが、後者では、燃え尽きる前  
に良木を救い出したわけで、趣きが異なる。とにかく、『後漢書』  
蔡邕伝から応神紀の記述が影響を受けた可能性は認められよう。そ  
の場合も大樹伝説という側面は、『後漢書』蔡邕伝にも見出すこと  
はできない。それでは応神紀の記述は大樹伝説と関係がないのであ  
ろうか。『後漢書』蔡邕伝の記述で注目したのは、「桐を焼きて」  
とあるところから、焦尾琴が、桐から作られたことが、明記されて  
いることである。

桐が、琴の材料として適していたらしいことは、『桓譚新論』に  
神農始めて桐を判ちて琴を爲る。

とあり、『文選』の嵇叔夜の「琴の賦」にも見出せることから分か  
る。

惟れ椅梧の生ずる所、峻嶽の崇岡に託す。重壤を披いて以  
て誕に載ひ、辰極に参りて高く驤る。天地の醇和を含んで、  
日月の休光を吸ふ。鬱紛紜として以て独り茂り、英蕤を昊蒼  
に飛ばす。夕べに景を虞淵に納れ、旦に幹を九陽に晞す。千  
載を経て以て、価を待ち、寂として神のごとく時ちて永く康  
し。……是に於て遯世の士、榮期・綺季の疇、乃ち相與に  
飛梁に登り幽壑を越え、瓊枝を援き峻嶒みに陟り、以て其の  
下に遊ぶ。……茲の梧を顧みて慮を興し、物を仮りて以て  
心を託せんことを思ふ。乃ち孫枝を斲りて、任ふる所を准量  
す。至人思ひを攄べ、制して雅琴を爲る。……新声悽亮た  
り。何ぞ其の偉なるや。

右の『文選』の記述に於ても、椅梧すなわち桐から、琴が作られ  
る経過が描かれている。ここで注目されるのは、琴の材料たる桐が

大樹として描写されている点である。「重壤を披いて以て誕に載ひ」つまり、「大地を押し開いて大いに生え」、「辰極に参りて高く驥る」つまり、「北極星に届かんばかりに高くそびえている」ことは、この椅梧が大樹であることを示す以外の何物でもなからう。故に、『文選』の「琴の賦」に出てくる椅梧は、中国の大樹伝説の一つと考えて間違いないであろう。

さらに、右には、「夕べに景を虞淵に納れ、旦に幹を九陽に晞す」という注目すべき一節が見出せる。「虞淵」とは、『淮南子』に「日は虞淵の汜（みず）に入る」とあるように、日の沈む所である。一方、「九陽」とは、『楚辞』「遠遊」に、「朝に髪を湯谷に洗ひ、夕べに余が身を九陽に晞す」とある「九陽」と同じで、十あつたとされる太陽のうち、九つの太陽を指す。尤も、『文選』の李善注では、「九陽とは九天の涯を謂ふ也」としているから、「九陽」で、「空の涯」を表わすこともあつたようだ。しかし、『山海経』「海外東経」では、次のように述べる。

下に湯谷有り（谷中の水熱きなり）。湯谷の上に扶桑有り（扶桑は木なり）、十日の浴する所なり。黒齒の北に在り。水中に居り、大木有り。九日下枝に居り、一日上枝に居る（莊周云ふ、昔者十日竝び出で、草木焦枯すと。『淮南子』にも亦云ふ。堯乃ち羿をして十日を射しめ、其の九日に中つ。日中の鳥尽く死すと。・・・）

この『山海経』「海外東経」の「九日」は、当該の「九陽」と同じものと判断されるから、やはり、基本的には、「九陽」とは、九つの太陽を表わすと考えるべきであろう。それ故、「夕べに景を虞淵に納れ・・・」の意味は、「夕べには、木の影を西方の日の沈む

所である虞淵に落とし、朝には、東方の扶桑の枝にある九つの太陽から光を受ける」となる。つまり、ここには、太陽信仰との関わりが、看取されるのである。

そこで、眼を転じて、日本の大樹伝説を見ると次のようである。

① 筑紫後国の御木に到りて、高田行宮に居します。時に僵れたる樹有り。長さ九百七十丈。百寮、其の樹を踏みて往来ふ。・・・爰に天皇、問ひて曰はく、「是何の樹ぞ」とのたまふ。一の老夫有りて曰さく、「是の樹は歴木といふ。嘗、未だ僵れざる先に、朝日の暉に当りて、則ち杵嶋山を隠しき。夕日の暉に当りては、亦、阿蘇山を隠しき」とまうす。天皇の曰はく、「是の樹は、神しき木なり。故、是の国を御木国と号べ」とのたまふ。（日本書紀景行天皇十八年の条）

② 昔者、棟木一株、郡家の南に生ひたりき。其の高さは九百七十丈なり。朝日の影は肥前の国藤津の郡の多良の峯を蔽ひ、暮日の影は肥後の国山鹿の郡の荒爪の山を蔽ひき。云々。因りて御木の国と曰ひき。（筑後国風土記逸文三毛郡）

③ 昔者、樟樹一株、此の村に生ひたりき。幹枝秀高く、莖葉繁茂りて、朝日の影には、杵嶋の郡の蒲川山を蔽ひ、暮日の影には、養父の郡の草横山を蔽へりき。日本武尊、巡り幸しし時、樟の茂り栄えたるを覽まして、勅りたまひしく、「此の国は榮の国と謂ふべし」とのりたまひき。因りて榮の郡といひき。（肥前国風土記佐嘉郡）

④ 明石の駅家。駒手の御井は、難波の高津の宮の天皇の御世、楠、井の上の生ひたりき。朝日には淡路島を蔭し、夕日には大倭島根を蔭しき。仍ち、其の楠を伐りて舟に造るに、其の迅き

こと飛ぶが如く、一楫に七浪を去き越えき。仍りて速鳥と号く。ここに、朝夕に此の舟に乗りて、御食に供へむとして、此の井の水を汲むに、一旦、御食の時に堪へざりき。故、歌作みして止めき。唱に曰はく、

住吉の 大倉向きて 飛ばばこそ 速鳥と云はめ 何か速鳥。(播磨国風土記逸文速鳥の条)

①④の大樹伝説は、朝日・夕(暮)日に照らされて、大樹の影が遠方まで覆うという共通の構造を備えている。勿論、これは、大樹の途方もない大きさを物語るものであるが、同時に大樹伝説が、大陽信仰と深い結び付きを持っていたことを示すものである<sup>3)</sup>。

このことから考えれば、『文選』「琴の賦」の「夕べに景を虞淵に納れ、且に幹を九陽に晡す」という一文に見られた太陽信仰は、大樹伝説との関わりに於て理解されるべきことが改めて認識されよう。

このことは、『文選』「琴の賦」が影響を与えたとされる万葉集巻五、八一〇番歌の題詞にも、それを見出すことができる。

大伴淡等謹みて状す

梧桐の日本琴一面 対馬の結石山の孫枝なり

此の琴夢に娘子に化りて曰はく、余根を遙島の崇き巒に託け、幹を九陽の休き光に晡す。長く煙霞を帯びて、山川の阿に逍遙し、遠く風波を望みて、雁と木との間に出入す。唯し百年の後、空しく溝壑に朽ちなむといふことを恐るらくのみ。たまたま良匠に遭ひて、削りて小琴に爲らる。質の鹿く音の少しきなることを顧みず、恆に君子の左琴を希ふといへり。これは、『文選』の「琴の賦」を要約したような本文であり、「琴

の賦」をよく読み、巧みに利用したことが知られる。特に「幹を九陽の休き光に晡す」とある部分には、太陽信仰との関わりを見出せる。また「梧桐の日本琴一面 対馬の結石山の孫枝なり」という一文には、琴が、「孫枝」から作られたことが明記されており、そのことは、取りも直さず、この原木たる梧桐が、大樹であったことを示している。つまり、万葉集巻五、八一〇番歌の題詞には、『文選』「琴の賦」と同様な、太陽信仰と結び着いた大樹伝説が見られるのであつて、やはり、琴と大樹伝説が、深く結合していると言えよう。

さらに、時代は下るが、宇津保物語に次のような例が見られる。三年といふ年の春、大きな峯にのぼりて、見めぐらせば、いたゞき天につきて、嶮しき山、遙かに見ゆ。俊蔭、いさをしきころ、はやき足をいたして行くに、辛うじて、その山にいたりて見たせば、千丈の谷の底に根を指して、末は空につき、枝は隣の国に指せる桐の木を倒して、割木づくる者あり。・・・阿修羅、木をとりいで、割りこづくる響に、天稚御子くだりまして、琴三十つくりてのぼり給ひぬ。

この宇津保物語に於ても、琴の材料は桐であり、且つ、その桐は、「千丈の谷の底に根を指して、末は空につき、枝は隣の国に指せる」樹であつて、まさに大樹そのものに外ならないのである。それ故、宇津保物語の例も、琴と大樹伝説が、結び付いたものと言えよう。

以上、『後漢書』蔡邕伝・『文選』「琴の賦」・万葉集巻五、八一〇番歌の題詞、宇津保物語「俊蔭卷」から導かれることは、琴が作り出される木は、基本的に大樹として把握されているということである。『後漢書』蔡邕伝の場合は、大樹であることは明確ではないが、燃え残りから琴が作られることを考えても、本来的には、大樹から

琴が作られる話として理解されていた可能性が強いのでなろうか。従って、大樹伝説の一要素として、大樹から琴が制作される説話が、かなり強い要素として存在したことは否定できないと思われる。

この考察を基にして考えてみると、前述の応神紀の紀述は、どのように理解すべきであろうか。

出典とされる『後漢書』蔡邕伝のみを見る限りは、大樹伝説と直接的には結び付けなくても理解は可能であろう。しかし乍ら、上述の諸例のように、大樹伝説の大きな流れの中で、大樹と琴の関係をみてみると、やはり、応神紀の記述も大樹伝説の一つとして位置づけることができよう。

何故ならば、応神紀の記述も、他の例と同様に、樹木から琴を作るといふ基本的な型は、一致しているからであり、また、次のような描写は、応神紀で琴の材料になった木も、本来、大樹であったことを推測させるからである。

例えば、「初め枯野船を、塩の薪にして焼きし日に、余燼有り。則ち其の燃えざること奇びて献る。天皇、異びて琴に作らしむ。」という描写で、「余燼」から「琴」を作るとするのは、その「余燼」が、やはり、かなりの大きさを持っていなくてはならず、延いては原木が大樹であった可能性を示していると言えるのではないかと思われるのである。

以上、文献によって強弱はあるものの、大樹伝説の一要素として、大樹から琴を作るといふモチーフがあることが、指摘された。

## 二、琴が大樹から作られる理由

前節で、琴と大樹伝説の関係が指摘されたが、そもそも琴は、何故、大樹から作られるのであろうか。そのためには、古代人にとって琴が如何なる意味を持っていたのかを検討しなければならぬ。

古事記の仲哀天皇の条には、次のような記事がある。

故、天皇筑紫の訶志比宮に坐しまして、熊曾國を撃たむと  
したまひし時、天皇御琴を控かして、建内宿禰大臣沙庭に居  
て、神の命を請ひき。是に大后神を帰せたまひて、言教へ覚  
し詔りたまひしく、「西の方に國有り。金銀を本と為て、目  
の炎耀く種種の珍しき宝、多に其の國に在り。吾今其の國を  
帰せ賜はむ。」とのりたまひき。爾に天皇答へて白したまひ  
しく、「高き地に登りて西の方を見れば、国土は見えず。唯  
大海のみ有り。」とのりたまひて、詐を為す神と謂ひて、御  
琴を押し退けて、控きたまはず、黙して坐しき。爾に其の神  
太く忿りて詔りたまひしく、「凡そ茲の天の下は、汝の知ら  
すべき國に非ず。汝は一道に向ひたまへ。」とのりたまひき。  
是に建内宿禰大臣白しけらく、「恐し、我が天皇、猶其の大  
御琴阿蘇婆勢。」とまをしき。爾に稍に其の御琴を取り依せ  
て、那麻那摩邇控き坐しき。故、幾久もあらずて、御琴の音  
聞えざりき。即ち火を挙げて見れば、既に崩りたまひぬ。……  
「今如此言教へたまふ大神は、其の御名を知らまく欲し。」  
とこへば、即ち答へて詔りたまひしく、「是は天照大神の御  
心ぞ。亦底筒男、中筒男、上筒男の三柱の大神ぞ。……」  
とのりたまひき。

ここでは、天照大神並びに、底筒男、中筒男、上筒男の三柱の大  
神、即ち、住吉三神の託宣を請うために、琴が降神の楽器として用  
いられている。

これは、日本書紀でも同じで、神功皇后撰政前紀(仲哀天皇九年)  
の本文には、次のようにある。

三月の壬申の朔に、皇后、吉日を選びて、斎宮に入りて、  
親ら神主と為りたまふ。即ち武内宿禰に命じて琴撫かしむ。  
中臣烏賊津使主を喚して、審神者にす。因りて千繪高繪を以  
て、琴頭尾に置きて、請して曰さく、「先の日に天皇に教へ  
たまひしは誰の神ぞ。願はくは其の名をば知らむ」とまうす。  
七日七夜に逮りて、乃ち答へて曰はく、「神風の伊勢国の百  
伝ふ度逢原の折鈴五十鈴宮に所居す神、名は撞賢木嚴之御魂  
天疎向津媛命」と。亦問ひまうさく、「是の神を除きて復神  
有すや」と。・・・「・尾田の吾田節の淡郡に所居る神有  
り」と。・・・「亦有すや」と。・・・「天事代虚事代玉籤  
入彦厳之事代神有り」と。・・・「亦有すや」と。・・・  
「日向国の橘小門の水底に所居て、水葉も稚に出で居る神、  
名は表筒男・中筒男・底筒男の神有す」と。  
又、同じく神功皇后撰政前紀の一書には、次のようにある。  
足仲彦天皇、筑紫の檀日宮に居します。是に神有して、沙  
塵原主の祖内避高国避高松屋種に託りて、天皇に誨へて曰は  
く、「御孫尊、若し宝の国を得まく欲さば、現に授けまつら  
む」とのたまふ。便ち復曰はく、「琴將ち来て皇后に進れ」  
とのたまふ。則ち神の言に随ひて、皇后、琴撫きたまふ。是  
に、神、皇后に託りて、誨へて曰はく、「今、御孫尊の所望

の国は、譬へば鹿の角の如し。・・・金・銀多なる、眼炎く  
国を以て御孫尊に授けむ。」とのたまふ。時に天皇、神に對  
へて曰はく、「・・・然るを未だ誰の神といふことを知らず。

願はくは其の名を知らむ」とのたまふ。時に神、其の名を称  
りて曰はく、「表筒雄、中筒雄、底筒雄」と。如是三の神の  
名を称りて、且重ねて曰はく、「吾が名は、向置男聞襲大歴  
五御魂速狭騰尊なり」とのたまふ。

日本書紀神功皇后撰政前紀の本文と一書の記事からわかるように、  
日本書紀でも、琴は神を呼び出すための呪具となっている。

他にも、皇太神宮儀式帳の九月神嘗祭の条には、次の如き一文が  
見られる。

同じき日(二五日)の夜亥の時を以ちて、御巫・内人を第  
二の御門に侍らしめて、御琴給て天照坐太神の神教へを請て、  
即ち教ふる所の雑の罪事を、欄宜の館より始めて、・・・解  
き除ひ清め畢んぬ。

ここでは、天照坐太神つまり天照大神の神託を伺うために、彈琴  
が行われている。

以上の諸例から導かれることは、琴が、神を降ろし、神意を伺う  
ための呪具としての役割を果たしていることである。

それでは何故、琴は神意を伺う呪具に成り得るのか。また、その  
ことは、大樹が琴から作られることと如何に係わるのか。

琴は勿論、楽器であるから、その琴の出す音響が、神の降臨を実  
感させたというようなことも当然あるであろう。あらゆる宗教で、  
音楽、特に楽器の演奏が、重要な祭儀と深く関わっていることが、  
それを裏づけよう。しかし、単にそれだけでは、琴と大樹の関わり

は説明できない。両者の関係を明らかにするためには、琴の演奏によって、如何なる神が降臨しているのかを確かめることが、先ず必要であろう。

古事記の仲哀天皇の条に現われたのは、次の神である。

① 天照大神

② 底筒男、中筒男、上筒男の三柱の大神

日本書紀神功皇后撰政前紀本文では、次の通りである。

③ 撞賢木蔽之御魂天疎向津媛命

④ 尾田の吾田節の淡郡に所居る神

⑤ 天事代虚事代玉籤入彦蔽之事代神

⑥ 表筒男・中筒男・底筒男の神

日本書紀神功皇后撰政前紀の一書では、次の神が現われる。

⑦ 表筒雄・中筒雄・底筒雄

⑧ 向置男聞襲大歴五御魂速狭騰尊

さらに、皇太神宮儀式帳の九月神嘗祭の条では、

⑨ 天照坐太神

が現われた。以上の九柱の神について検討したい。

このうち、すぐに理解されるのは、②⑥⑦の神は、表記こそ若干異なるものの、住吉大社の祭神である底筒男、中筒男、上筒男の三柱の大神を指していることである。この三柱の神については、種々の解釈があるが、古くから、オリオン座の三つ星に比定する説があり、先に拙稿でもそのことを論じたことがある。

オリオン座の三つ星説に基づけば、琴で招かれたのは、天上の星の神であることになろう。

また、①と⑨の神は、やはり、表記は少し異なるが、同じ、天照

大神を指していることも確かである。天照大神は、言うまでもなく、太陽神であって、同じく、天上の神である。そして、③と⑧の神も諸説あるが、太陽神天照大神の荒御魂とする説が有力である。つまり、③と⑧の二柱の神も天上の神であることになろう。

さらに、④の神は、稚日女尊と同神とされているが、この稚日女尊は、天照大神の分身または妹とされる神であって、その太陽神としての性格は、やはり、天上の神であることを表わす。

残るは、⑤の神であるが、この神の名の中に三回も出て来る「事代」とは、「神がかりして、託宣をつたえるもの」の意（大系本『日本書紀』の補注）とされ、神の託宣を伝えること自体が職能であった神であることが知られる。注目されるのは、この神の名に「天事代虚事代」と、「天」と「虚」という天上や虚空を表わす言葉が含まれている点である。つまり、天上や虚空に存在する神々の託宣を伝えることが、この神の職能であるとともに、名義でもあると推測されるのである。

以上の考察によって、琴に導かれて出現し、託宣を伝える神々は、すべて例外なく、天上の神々であると言い得よう。これは、後世の宇津保物語や、小夜衣、中世小説『あめわかみこ』等の作品で、琴の妙音に天降るのが、天女や天稚御子といった天上の神々であることと軌を一にするものであろう。

それでは、琴によって天上の神々が降臨することと、琴が大樹から作られることは、いかに関連するものであろうか。次節に於て、考察してみたい。



## 三、宇宙樹としての大樹伝説と琴

万葉集卷五、八一〇番歌の題詞が、『文選』「琴の賦」の影響を受けていることについては、前述したが、その『文選』「琴の賦」では、琴の材料となる大樹は、「辰極に参りて高く驪る」つまり、「北極星に届かんばかりに高くそびえている」と描かれていた。勿論、「白髮三千丈」的な誇張であるとも取れるが、神話学的に解釈すれば、天上世界へ達する大樹が描かれていると理解できる。

同様に、宇津保物語では、「千丈の谷の底に根を指して、末は空につき、枝は隣の国に指せる桐の木」から琴がつくられている。宇津保物語においても、木末が天上世界に到達している大樹が、琴の材料になっていたのである。また、古事記仁徳天皇の条のように、「其の樹の影、旦日に当れば、淡道島に逮び、夕日に当れば、高山を越えき。」と描写された「高樹」は、たとえ天へ達していると明示していなくても、やはり、それに相当する大樹であると見為すのが自然であろう。そのことは、古事記雄略天皇の条に見られる長谷の百枝槻の大樹伝説において、次のような一文が見られることからも裏づけられよう。

纏向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮 夕日の 日がける宮  
 ・・・ 真木さく 檜の御門 新嘗屋に 生ひ立てる  
 百足る 槻が枝は 上枝は 天を覆へり 中つ枝は 東を覆へり  
 下枝は 鄙を覆へり

ここでは、槻の大樹の生えている日代の宮は、朝日・夕日に照らされた宮殿として設定されており、太陽信仰の影響が窺われる。表現は違っても、他の大樹伝説に見られる太陽信仰と結局は通じるも

のと推測される。また、日代の宮の新嘗屋に生えた百枝槻は、上枝が天上、中つ枝が東国、下枝が西国を、それぞれ覆っている。つまり、この百枝槻の大樹は、天上世界に到達する大樹として描写されていることになろう。<sup>5)</sup>

ところで、天上世界に到達する大樹は、宇宙樹、世界樹とも呼ばれる。ミルチャ・エリアーデに拠れば、宇宙樹は大きく三つの性格を有する。<sup>6)</sup>

- ① 世界の中心に位置すること。
- ② 天上世界・地上世界・地下世界の三つの宇宙領域を連結すること。

- ③ 世界の神聖性・豊饒性・永続性を表わすこと。

この宇宙樹の性格から判断すれば、大樹伝説に於て、大樹が天上世界に達していることは、まさに宇宙樹の②の性格を示していることになろう。つまり、大樹は、その大樹自体によって、地上世界と天上世界を連結していることになるだろう。地上世界と天上世界が連結しているということは、その大樹を伝わって、天地の交流が出来るということに他ならない。

先に、琴によって降臨する神々が、天上の神々ばかりであることを指摘した。そして、その琴は大樹から作られた。

それ故、天上の神々が地上に降臨する場合を考えれば、第一義的には、天地を連結している大樹がある場合には、大樹を伝わって降りて来ることになろう。古くから、非常に高い樹木が、神の降臨する依代と見為されて来たのは、一種の宇宙樹の意味合いがあったからであろう。

一方、琴に対して、天上の神が降臨する場合は如何に考えるべき

であろうか。これは、大樹が、天地を連結し、神の降臨を導くものという意識が強まれば、必然的に、大樹から作られるものも、大樹と同じ役割を果たすものと見為されたのではなからうか。素材が持っていた機能を、製品が受け継いだとも言えよう。

逆に言えば、琴は、大樹から作られることによつて、天上の神々を降臨させる力も持つことになるのであつて、宇津保物語に見られるような、不思議な力を持つ琴は、必然的に大樹伝説と結び付かざるを得なかつたことにならう。

## 結 び

以上、大樹伝説と琴の関係について考察してきた。結論として、大樹は、宇宙樹としての性格を持ち、天地を結合し、天上の神々が地上に降臨するための通路としての役割を果たしていることから、其の大樹から作られた琴にも同じ性格が付与され、その結果、大樹伝説と琴が密接に結び付いたと言えよう。つまり、琴は、大樹から作られることにより、聖性を獲得し、天上の神々を降臨させる呪具となり得るのであつて、これは、極めて神話的な発想であると言えよう。それ故、大樹伝説を明確に伴っている仁徳記の方が、明確な大樹伝説を欠く応神記よりも話型としてはより完全な形であると言えようし、他の場合も同様であろう。なお、肥前国風土記神埼郡に次のような一文がある。

琴木の岡 高さは二丈、周りは五十丈なり。郡の南にあり。此の地は平原にして、元来岡なかりき。大足彦の天皇、勅りたまひしく、「此の地の形は、必ず岡あるべし」とのりたまひて、

即ち、群下に令せて、此の岡を起し造らしめたまひき。造り畢へし時、岡に登りて、宴賞したまひ、興、闌ぎたる後、其の御琴を竖てたまひしに、琴、樟と化為りき。高さは五丈、周りは三丈なり。因りて琴木の岡といふ。

これは、今まで見て来た大樹伝説とは逆に、琴が樹木に変化する話である。

しかし乍ら、よく検討してみると、平原の中央に作られた岡という舞台設定、仁徳記や、応神紀、また、景行紀などの大樹伝説のように、天皇が係わっていること、琴と樟という大きな樹木の関係であること等、大樹伝説、あるいは、宇宙樹との関連を髣髴とさせるものがある。なぜなら、平原の中央ということは、前節で示した宇宙樹の性格の①に見られた「世界の中心に位置すること」に絡るし、天皇との係わりは、同じく③の「世界の神聖性・・・」と関わるし、樟は、桐と並んで、大樹伝説によく現われる樹木であり、また、植物学的にも、日本で最も高木となる樹木だからである。勿論、五丈という大きさは、大きいとは言つても大樹伝説としては、物足りない大きさであろう。だから、完全な形で存在しているわけではない。それでも、琴と樹木の関係が描かれていることは、広い意味において、大樹伝説の性格を有していると言つても良いのではないかと考へる。それ故、肥前国風土記神埼郡の一例は、大樹伝説の一変形として位置付けたいと思う。

## 注

- (1) 河村秀根・益根『書紀集解』、谷川士清『日本書紀通証』等。
- (2) 『文選』・『山海経』の引用は、『全釈漢文大系』（集英社）に拠る。
- (3) この点については、拙稿「大樹伝説に見られる宇宙樹的要素と生命の水―雄略記百枝槻の条を中心として―」（『静大国文』第二九号）（静岡大学人文学部国文談話会、昭和五九年二月）を参照されたし。
- (4) 詳しくは、拙稿「住吉三神の解釈について」（『国文談話会報』第二五号）（静岡大学人文学部国文談話会、昭和五四年十二月）・「日本神話の星（上）」『星の手帖』四三号（河出書房新社、平成元年二月）を参照されたし。
- (5) 注(3)に同じ。
- (6) ミルチャ・エリアーデ著、堀一郎訳『シャーマニズム 古代的エクスタシー技術』（冬樹社 昭和五六年九月）に拠る。
- (補注) 本文中、引用文は、古事記・日本書紀・万葉集・風土記とも、日本古典文学大系本に拠り、旧字体は、適宜、新字体に直した。